創元選書

濁り酒

辰野隆

177

創元社發行

濁り酒

辰野隆著

濁り酒

昭和二十四年九月二十日　初版發行
昭和二十四年十月十日　再版印刷
昭和二十四年十月二十日　再版發行

定價二〇〇圓
地方賣價二二〇圓

著者　辰野隆

發行者　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四　矢部良策

印刷者　横濱市中區鍛冶二九　土岐佐光

發行所　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四（大阪市北區樋上町四五）
株式會社　創元社
電話カヤバ町(66)二〇六四、四〇八三、五二六三
振替東京一五六五、大阪五七〇九九番

萬一亂丁落丁がありましたら取替へます

文壽堂印刷・小高製本

濁り酒目次

東大回顧……三
大學界隈……一八
巨人露伴の片鱗……三八
鈴木三重吉との因緣……五〇
母子兄弟……六四
グルウ大使と齋藤夫人……七七
書齋から見た政界……八九
スポオツと勉學……一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

甲子園の印象……一一八
水泳の思出……一二五
水狂日記……一三〇
空瀾先生……一四三
不思議な男……一五三
歐洲双六……一五八
フランス音樂の思出……一六五
愛書癖……一七三

ポオル・ヴアレリイに就て……一九六
パスカル是非……二一六
フロオベエルの自覺……二三三
フランス革命夜話（1）……二五五
フランス革命夜話（2）……二六九
フランス革命夜話（3）……二八二
後記……鈴木信太郎
——附・辰野隆略年譜——

濁り酒

東大回顧

濱尾・山川時代

今から十數年前、長與又郎博士が東大總長の椅子に著いて、それまで總長であつた小野塚喜平次博士が退いて、間もない頃であつた。煩はしい總長事務から解放された小野塚博士は一週に數回、法學部の研究室や圖書館の閲覧室に通ひながら、專門の政治學の研究に餘念なかつた。正午頃になると、博士は運動場西側の丘の上の教員食堂に――昔、御殿風の建物があつて、それを食堂に當てたところから、御殿と云へば今もなほ食堂を意味することになつてゐる――その食堂に、午食をしたために小柄な姿を運ぶのであつた。或日、僕は午食後の煙草を呑みながら、博士と四方山の話をしてゐたが、談たまたま、嘗て名總長と謳はれた濱尾新、山川健次郎兩先生に及んで草々の思出に耽つた。僕は博士がこの二人の大先輩をどう觀てゐるかに少なからぬ興味を持つてゐたので、博士の追懐談に耳を傾けた。博士の言に從へば、要するに、山川

は――今では言葉そのままには覺えてゐないが――舊式な敎育家にすぎず、濱尾は――これは今もなほ言葉通りに分明に覺えてゐるが――單なる馬鹿であつた。この評語は兩大家に對する僕の日頃の見解と全く相反してゐたにも拘らず、別に意外でもなく、評者に對して些の惡感も持ち得なかつた。舊式と云へば、磐梯山爆裂の歲に買ひ求めたといふ山川總長の山高帽は正に古色蒼然、又或年の武道大會に於ける濱尾總長の東京帝國萬歲といふ祝唱は、日本の萬歲と大學の萬歲とを兼ねたやうな、兼ねぬやうな馬鹿馬鹿しいもので、思はず失笑したことを思ひ出したからであつた。加之、僕はかねて、小野塚博士の人物に就いては敬愛の念を抱いてゐたからでもあつた。博士は極めて率直で厭味のない質實な自由主義者でもあり、頭腦の働きは、直感を缺いてゐたが、頗る周密で分析的であつた。嘗て或る結婚披露の席上、媒酌人たる挨拶で、自分は媒酌人としては甚だ不適當な人間であるから、今まで、常に媒酌人たるの榮譽を固辭して、此度も再三辭退したにも拘らず、已むを得ず引き受けたものの、實は新郎に就いても、新婦に就いても、全然知識を持つてゐない、而も媒酌の責を負はざるを得なくなつた、といふ理由を三十分ばかり縷々として、娓々として說明に及んだ、といふ話を當夜その席に連らなつた友人から傳聞して、如何にも小野塚先生らしいと笑つたことである。「只だ分明に極むるが爲めに翻つて所得をして遲からしむ。早く知る燈は是れ火なることを。飯熟すること已に多

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

時」といふ禪家の綺語も自ら思ひ出されて可笑しい。之を碎いて譯すと、同じ事なら、ひとつ事、火が無うて、燈があろか、屁理窟捏ねりや、飯や焦げる、となるのであらう。雪は白く鷺も白しと言つても博士は素直に承認してはくれない人である。先づ、白といふ色を定義して、白に幾多の近い色を片端から排除して行つてから、改めて、雪の白さ、鷺の白さを比較して、然る後に初めて、雪も鷺も大體に於いて白いと謂ひ得ぬこともない、と漸く認めるやうな學者なのである。されば、銀椀に雪を盛り、明月に鷺を藏す、といふやうな文句を卽座に掴んで呑みこんで、その意味、氣合、語勢、風懷を說明なしに會得する頭腦ではなかつた。況や聞聲悟道見色明心とは凡そ無緣の君子であつた。

博士の性格には、一面に小兒のやうに純眞な、從つて我儘なところ——それさへ易く容せる底の——があつた。嘗て法學部の敎授會に於いて、若い助敎授の抗議に腹を立てて「助敎授の癖に生いきな……」と叱りつけたことがあつたさうである。これなども博士の愛すべき性情の一端を立證するとも憎む氣には毛頭なれぬ愉快なその場の光景を目に浮ばせる。加之、博士自ら名總長を以て任じてゐたらしい穉氣さへ、折に觸れての語氣言端に露はれるのを僕は寧ろ慶ぶ可しと思つた。

博士は學生時代から秀才の名が高く、後の鳩山秀夫氏が學生時代に小野塚以來と謂はれたの

でも、博士當年の麒麟兒ぶりが想見し得られるのである。然し、子供の自分から首席を占め通して、大學を恩賜の銀時計で出ると、直ぐに助教授になり教授になるやうな俊髦は往々にして、人生の一角に對して肝心な理解を缺くやうな、何となく毛が三本足りないと云つたところがある。特に人情の機微や人物の鑑識にかけては一角缺如や三本不足を露呈することが屢ばあるのだ。小野塚博士も亦さうした弱點を確かに持つてゐた。それ故、博士が極めて率直に淡白に、山川は古く濱尾は愚かしと斷じたその評語にも、博士の愛す可き弱點が隱さずに、氣取らずに現はれてゐるのが却て快適ではあつたが、然し、僕は僕として、博士の言を無條件に承服する氣にはなれなかつた。何時か折があつたら、濱尾・山川兩總長論を草して、博士の一讀を煩はしたいと思つてゐたが、不幸にして博士は昨年不歸の客となつて、竟に卑見を批評していただく機を永く失つた。が然し、言はで默するのは腹ふくるるわざでもあるから、此處に僕の濱尾・山川管見を述べて、讀者に茶呑噺を提供するのもあながち無用ではなからう。

★

僕は明治四十一年に東大法科に入學して、大正二年に文科を卒業した——法科に五年、文科に三年つまり前後八年間、赤門風來坊、大學地廻りといふやくざ生活を送つたのだ——が、そ

の間の總長が初めは濱尾、後が山川であつた。（兩先生とも第二回目の總長時代であつた。）今から顧ると、この時代が東大の全盛期ではなかつたらうか（或は近代日本の全盛期であつたかも知れない）。濱尾・山川が日本の最高學府に總長として、どつしりと腰を下し、各分科の卓れた教授・助教授を天成の、重厚な峻嚴な人格と識見とを以て所を得しめ、天下の教育界に範を垂れてゐたやうに思はれる。

三十餘年前のことであつた。英米の知名の教育家數名が東大に濱尾總長を訪れた。話の要件は、中國に大學を設立するに就いて、濱尾の意見を徵したのである。濱尾の答は洵に中正公明であつた。中國は最も古い文明國である。中國人は高い文明の誇りを持つてゐる。その文明人たる誇りを傷けず、その宗教乃至宗教的感情を尊重する限り、如何なる主義の大學も設立し得るであらうといふのであつた。何といふ健やかな見識であらう。今日に於いては、一般の知識人なら、このくらゐのことは誰でも言ふ常識中の常識だが、然し當時の日本は中國に對して斯かる公平な態度を以て接してはゐなかつた。知識階級も輿論も、日清役以來、中國を戰敗國として、亡國として蔑視し無力視し、歐米文化に心醉せぬまでも、之を甚しく尊重してゐた際に、東洋に於ける中國の地位を正しく認めて、明快適確な答案を與へた濱尾の識見に問者たちは打たれたのであつた。日常の擧措や言辭は何時も茫漠とした印象を與へて、晝行燈の觀があ

つた濱尾は、一度重大な問題に會ふと莞爾として眞理を吐くのであつた。

嘗て陸軍當局が一年志願兵制を廢止しようと企てて、陸軍部内では既定の方針として、之を東大に通告したことがあつた。それは帝國大學、殊に修學中の全學生に取つては晴天の霹靂であつた。適齡學生が大學課程を修了するまで徵兵を猶豫し得なくなれば、正に一大事である。濱尾は國家の學問を故なく中斷しようとする陸軍の暴擧に斷乎として立ち向かつた。彼は陸軍省に赴いて、石本中將——當時の陸軍大臣であつたか、次官であつたか——を捉へて、斯かる有害無益な意圖の實現す可からざる理由を諄々と誡め諭し、軍部が非を改むるまでは幾度となく主張を繰返し繰返し、頑として動かうともしなかつた。若し陸軍にして飽くまで無謀な策を强行する意志なら、帝國大學も亦今後陸軍の委託學生は斷じて赤門に入ることを謝絕すると陳べた。それは當時の陸軍に取つては思ひ設けぬ痛手であつた。當時の軍事科學は、帝國大學の助力を俟たぬ限り、軍部内では如何とも出來なかつたからである。磐石の如き濱尾の態度には流石の陸軍當局も折れざるを得なかつた。斯くて一年志願兵制は遂にそのまま存置されることとなつたのである。もし、これが濱尾・山川以後の總長であつたら如何なる結果になつたであらうか。恐らくインテリ總長として、軍部の暴戾や低能ぶりを蔭では、痛列に非難したり、侮蔑したではあらうが、結局、御無理御尤の泣寢入りに了つたのではあるまいか。唯、近年の拾

ひものと云はれた名總長平賀讓博士なら、强靱なねばりを見せ、善鬪の跡を見せたでもあらうが、然し平賀時代は既に大學轉落の眞最中でもあり、勢權武門に歸した太平洋戰のさなかでもあつたから、學府たる大厦の顚らんとするや、一木の克く支へるところではなかつた。

濱尾の退いて後、山川が再度の總長となつた。一般には濱尾は慈母の如く、山川は嚴父の如しと謂はれたものであるが、古武士の如き山川の裡には慈母の淚を藏し、大佛のやうな濱尾に、時に秋霜の烈しさが現はれたのである。

山川は嘗て、常に陛下に咫尺する伊藤博文はじめ國家の重臣どもの品行を難じて、素行を愼しめと公に誡めたことがあつた。それが問題となつて、事件は山川の進退にまで及ばんとしたが、山川は端然として答へるのであつた。もし重臣等にしてその素行に疾ましきところ無しと敢へて言ふ勇氣あらば言へ。予は事實を列擧して答ふるところがあるであらう。と一歩も退かなかつた。歳が若かすぎて、竟に白虎隊の一員に加はることを許されなかつた山川の腰間には、生涯目には見えぬ秋水が横たへられてゐたのである。

世人はマルキシズム華やかなりし頃の森戸事件を未だ記憶してゐるだらう。東大經濟學部助教授森戸辰男が『經濟學研究』創刊號に「クロポトキンの社會思想の研究」を發表し、それが爲めに教職を去らねばならなくなつた顚末は此處に管々しく說くまでもあるまい。當時、山川

總長は問題の論文を讀んで、時を移さず、森戸君を總長室に呼び迎へた。君の論文を讀んだ。專門が異るから精しい批評は出來かねるが、要するに君は日本が共產主義國家となることを希望して居られるやうに思ふが、それに相違ないか、と問うたのである。森戸君は、それに相違ないと答へた。すると、總長は帝國大學は天皇陛下の大學であり、國家の大學である。日本が共產主義國家になれかし、と主張するのは國是に反する。どうか君の學說を改めて頂けぬだらうか。若し改める意志があるなら、君の身柄は責任を以て守らう。今、卽答せよとは迫らぬが、一晩熟考して、明日再び來て頂かうと云つた。翌日、森戸君は更らに總長と會見して、如何に反省しても、自說を翻すことは出來ぬと確答した。總長も、それでは已むを得ぬ、遺憾ながら辭表を出して頂きたいと賴んだ。森戸君も亦、自分の爲めに總長並に大學に迷惑をかけるに忍びぬからと、屑く辭表を差し出したのであつた。その日、總長は歸宅すると、次男建——當時、若き內務官吏、後の文部省專門學務局長——を書齋に呼び寄せて、實は今日自分は森戸君と別れを惜んで來た。苟も學者が一度學說を發表した以上、全責任を持つ可きである。自分が森戸君であつたら、やはり同じ態度に出でただらう。身柄を保證されて學說を改めるやうでは賴もしくない。流石に森戸君は男だ。よく覺えて置け。若し將來、汝が意見を發表するやうなことがあつたら、須く森戸君に倣へ、と色を正し聲を勵まして、訓誡したさうである。この

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo